

聖書箇所：ルカの福音書2章1～12節

説教題：救い主がお生まれになりました

#### 1 旧約の預言が成就した

(1) ユダの子孫として来られる（創世記49章8節）

先週まで三回に分けて、旧約聖書から救い主について預言されているところを見て参りまいりました。今日は、それらの預言がどのように成就したのかどうか、その事から確かめていきます。

まずヤコブが預言したことがどうなったかを確認します。ヤコブはこう語っていました。創世記49章8節。「ユダよ。兄弟たちはあなたをたたえ、あなたの手は敵のうなじの上にあり、あなたの父の子らはあなたを伏し拝む。」

ヤコブのときからおおよそ2000年経て、ローマ帝国がヨーロッパ中東地域を支配し、アウグストが皇帝に就きます。彼はあるとき戸籍調査をするよう命令します。イスラエルもローマ帝国の支配下にありますが、これに従わなければなりません。3節で、「人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かっていた」とあります。今なら、私のように岩手で生まれたものであっても、札幌市の区役所に届けばそれで手続きは終わりです。ところが、当時のイスラエルではわざわざ自分の先祖の町に行かなければ登録できません。なぜそんなことをしたのか確かな理由はわかりません。血筋、血縁、家系のつながりを重視する風習が中東地域にあったことが関係していると考えられています。

4節を読みます。「ヨセフもガリラヤの町

ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。」

ヨセフとマリヤはナザレに住んでいましたが、住民登録をするためにはベツレヘムに行かなければなりません。直線距離でおおよそ110Kmあります。臨月を迎えたマリヤにとって大変な距離です。それでもヨセフはベツレヘムに行きます。彼はダビデの家系だからです。ダビデはユダに属します。こうして、ヤコブが語ったとおり、救い主がユダ族の子孫として来られるとの預言が成就していきます。

(2) ひとりの男の子が、私たちに与えられる（イザヤ書9章6節）

次にイザヤの預言したことを確認します。イザヤ書9章6節。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。」

私たちは、もうなんでも神が子どもの姿をとって私たちのところに来てくださったことを聞いています。ですから、イザヤが語ったことにいまさら驚きません。しかし、もう一度このこと考えたいと思います。

そもそも救い主が私たちの所に来られるとき、べつに子どもの姿でなくてもよいはずですが、例えば、ヨセフの先祖にあたるダビデは青年になったとき、神に見いだされてイス

ラエルの王としての道を歩み始めました。ダビデが子どもであったときのことは聖書には描かれていません。同じように、救い主が私たちのところに来られるというなら、青年の姿であってもおかしくないのです。ところが救い主である方は、赤ちゃんの姿をして私たちのところに来るということにこだわります。その意味についてはまた最後に考えます。

とにかくイザヤが預言したとおりに、救い主はひとりの男の子の姿をとって来てくださいました。

### (3) ベツレヘムでお生まれになる (ミカ書 5章2節)

三つ目にミカが預言したことはどうなったかを見ます。ミカ書5章2節。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になるものが出る。」ひとこと言えば、救い主はベツレヘムでお生まれになるとミカは言っています。もう説明の必要はありません。そのとおりにになりました。私たちはクリスマスを迎えるたびごとに毎年このことを聞かされていて、これも不思議には思わなくなっています。

でもどうですか。ヨセフとマリヤはナザレの人です。ベツレヘムは自分の先祖の町ではありましたが、何か特別なことがない限り、ほとんど行くことのない町に過ぎません。ですからマリヤが子を宿したとき、この子どもはナザレで生まれることになるのが当然のように思ったでしょう。

それがどうして、ベツレヘムで産むことになったのか。今日の箇所にかかれていとお

りです。ローマ皇帝アウグストが住民登録をしろとの命令を出したからです。人間的な視点から見れば、ヨセフとマリヤには、とんだとぼつちりです。マリヤは臨月を迎えています。いつ産まれるかわからないというときに、旅をさせなければならぬ。ヨセフは頭を抱えたでしょう。マリヤだって、どうなるのか不安だったでしょう。でも命令に従わなければなりません。何とか苦勞して無事にベツレヘムに着いたと思ったら、心配したことが起きてしまいました。陣痛が始まってしまいます。人間の目から見ると、すべてが最悪のタイミングにしか見えません。

しかし神の視点から見直すなら、どうでしょうか。最悪ではなく、最善のタイミングでした。すべてが計画通りだったのです。神は当時の最高の権力者アウグストを動かし、ご自分がベツレヘムで産まれるようにと導かれます。ヨセフとマリヤは苦勞することにはなりましたが、もっともすばらしいタイミングでこの方は預言どおりにベツレヘムで、ユダの氏族として、男の子としてお生まれになりました。

## 2 羊飼いたちに告げられた

ここまで三人の預言者のことばがどのように成就したかを見てきました。

しかし、それでめでたしめでたしとはいきません。足りない事が一つあります。このままでは、マリヤを通して生まれた男の子がいったいだれなのか、わかる者はいないのです。

もちろんある方はこう言うかもしれません。ヨセフは夢を通して教えられていたはずだ。マリヤは御使いガブリエルをとおして、生まれてくる子どもが救い主であることは

教えられていたではないか。ヨセフとマリヤがそのことを言えばいいはずだ。でも、なんも証拠がないのです。自分の口から、「皆さん、この赤ちゃんは救い主です。だから拜んでください」と言ったとしても、だれも信用してくれません。

このとでも、神のとられた方法は、本当にすばらしいと思います。この赤ちゃんが救い主であることを証言するものが現れました。羊飼いたちです。彼らは、ヨセフやマリヤのことをまったく知らず、何のつながりもない人たちです。そんな人たちがやってきて、不思議なことを語り始めました。「実は昨日の夜、山の上で羊の番をしていたとき、不思議なことが起きた。急にあたりが明るくなって、なにごとかとびっくりして震えていたら、御使いが現れてこう言うのです。『きょうダビデの町で、あなたあたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。』それで、それが本当かどうか確かめに山から下りてきました。御使いの言うとおりでした。確かにここに寝ている子どもは救い主です。」

周りで聞いていた者たちは、最初こう言ったでしょう。「また酒でも飲んで、夢でも見ていたのだろう。嘘に決まっている。」しかし、羊飼いはまじめな顔をしてこう言います。「いや証拠があります。御使いは救い主を見分けるために、二つのことを教えてくれました。一つは、その子どもは布にくるまっている。もう一つはその子どもは飼い葉桶に寝かせられている。そのとおりの子どもが今の目の前におられるではないですか。」

これを聞いて、周りの人たちは、神のみわざに驚いたと 18 節に書かれています。

私は、救い主がお生まれになったことが、

まず最初に羊飼いたちに知らされたことにいつも感動します。世には、聖書の研究者も、宗教家たちも、高い地位に就く人たちも、優れた知恵を持った人たちもいたでしょう。しかしなぜか神は、そのような人たちではなく、世の中からはまったく目立たない人たち、汚れた服を着て、荒れた手をして、羊のにおいをふんぷんさせて、町の人たちからも田舎者と見られていた人たち、そんな人たちがまず最初に救い主の到来を知らされるのです。

神が、どのような者を特別に見てくださっているのか、これでおわかりでしょう。救い主がこの世にお生まれになった最初から、この方が貧しい者、取るに足りない者、愚かと思われている者のそばに寄り添おうとしていることを知らされます。

### 3 救い主の姿

最後に、御使いが羊飼いたちに告げた救い主のお姿について考えます 12 節を読みます。「あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶に寝ておられるひとりのみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」

もう少し原文の意味がわかるように訳せばこうなります。「あなたがたは、布に巻かれて、飼い葉桶に寝かせられているみどりごを見つけるでしょう。」

赤ちゃんですから、自分で布をからだに巻き付けるはずはありません。自分で飼い葉桶に入って寝るはずもありません。人の手で、この方のからだに布が巻かれました。人の手で、この方のからだに飼い葉桶の中に寝かされました。神である方なのに、皇帝アウグストさえも動かすほどの権威と力を持っておられる方なのに、私たちの目の前に現れてく

ださったとき、この方はなんと無力なお姿をとられたでしょうか。

この方は後に、羊飼いが証言したのとまったく同じ姿をとることになります。いつでしょうか。この方が、十字架で死なれたときです。今度は、飼い葉桶ではなく墓の中に布にくるまれて寝かされていきます。

すると、御使いが羊飼いたちに告げたことのもう一つの意味が明らかになります。この方は、私たちを救うために、やがて死んでくださる。そのような姿を最初からとってくださる。この方の十字架の歩みは、すでにクリスマスのおときから始まっていたことに気がつきます。

どこまでも小さく弱くなられる、救い主の御名をあがめたいと願います。